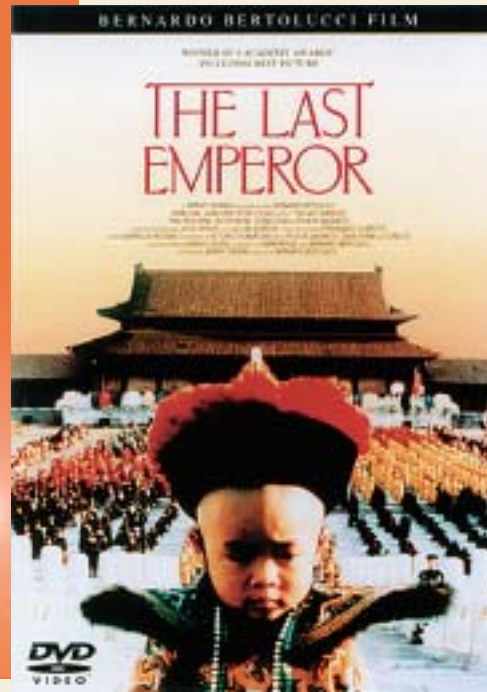


ラストエンペラーの舞台 故宮・紫禁城を訪れる

日本工営株式会社 コンサルタント国内カンパニー インフラマネジメント部 溝口伸一



■写真1—映画「ラストエンペラー」の有名な溥儀即位のシーン（太和殿前庭）

1—ラストエンペラー即位のシーンが行われた皇帝の威厳を象徴する太和殿前庭

これはベルナルド・ベルトリッチ監督作品の『ラストエンペラー』の有名なシーンである。3歳の愛新覚羅溥儀が清朝最後の第十代皇帝“宣統帝”としての即位の儀を行った場面である。舞台は、紫禁城の太和殿前庭……。

紫禁城は、明朝の永楽帝によって1420年に建立された。それから愛新覚羅溥儀が1911年孫文の辛亥革命により退位させられ、1924年に北京クーデターにより紫禁城を追われるまでの500年余りにわたり、北京の、そして広大な中国の中心であった。その規模は南北960m、東西750m、面積は72万m²に達する壮大なものである。

即位の儀の場面は、太和殿前庭で多くの家臣たちが「三跪九叩頭（“跪”の号令で跪き、“一叩、二叩、三叩”の号令で手を地面につけ、額を地面に打ち付ける動作を三回繰り返す）

を行う、荘厳なシーンであった。

このシーンがなぜラストエンペラーの最も華やかで象徴的な舞台として取り上げられたのであろうか。そして、なぜその舞台に太和殿前庭が取り上げられたのであろうか。

太和殿は皇宮の正殿であり、その前庭は公式儀式を執り行う正に皇帝の権威を知らしめるシンボルである。B・ベルトリッチ監督がこの象徴的なシーンに太和殿前庭を取り上げたのは、紫禁城のシンボル性を踏まえたものであったのではないだろうか。

2—ラストエンペラーが人間、愛新覚羅溥儀として描かれる長西街

愛新覚羅溥儀が自転車で、紫禁城外へ逃げようとした場面、このシーンを皆さんはご存知だろうか。

実はこの舞台、ラストエンペラーの中で何度か登場する。しかも、愛新覚羅溥儀の最愛の乳母王焦が紫禁城から追われ、溥儀が追いかけるシーンなど「心の揺れる場面、人間性を表現するシーン」で使われている。

この舞台は長西街と呼ばれる場所で、街に沿って建ち並ぶ建築物は、王子の休憩所だった。荘厳な紫禁城の中で唯一、生活の匂いのする場所であり、ラストエンペラーでは、そんな長西街の持つ雰囲気をも巧みに、そして効果的に人間的なシー



■写真2—溥儀即位のシーンで使われた太和殿前庭



■図1—紫禁城見取り図（出典：「故宮宝卷—真実の紫禁城を再現する」王鑑輪著、中国民族攝影芸術出版社）

ンの舞台として利用している。

3—時代の変換点が象徴的に描かれた映画の最初と最後に登場する乾清宮の玉座

今回紫禁城について調べるにあたって、実は非常に不思議に思ったシーンがある。それは溥儀が宣統帝として即位する場面で、乾清宮の玉座が舞台として選択されていることである。本来、皇宮の正殿である太和殿玉座が、公式な即位が行われるところである。

映画の即位の場面では、太和殿玉座が使われるべきであるにも係らず、当然のごとく乾清宮の玉座が使われているのである。

ここでもう一つのシーンに着目して欲しい。それは晩年溥儀が乾清宮の玉座に隠れて忍び込み、コオロギの入れ物を幼い衛兵に渡すシーンである。何とも微笑ましい場面であるが、このシーンで溥儀は完全にスクリーンから姿を消し、映画は終了する。

皇帝の生活空間であり、中国の精神的な中心である皇室の正殿、それがこの乾清宮である。乾清宮こそ、本当の明朝・清朝のシンボルと言える。

真の意味での即位は、この乾清宮の玉座から始まる。ラストエンペラーの物語りは正にここから始まった。

それとも一つ、乾清宮は寝宮であり、当然に皇帝たちの辞世の場でもあった。そのため、皇帝危篤の際には、重要大臣が乾清宮に呼び寄せられて皇帝と別れを告げ、皇帝の最後の論旨を受領する。

最後のシーンを振り返ってみよう。

年老いた溥儀は、幼い衛兵を呼び寄せ、コオロギの入れ物を衛兵に渡し、いなくなる……。

ここに込められたもの、乾清宮の持つ舞台の意味を知った今、そのシーンが語られているものの重さが伝わってくる。

即位の際の幼い宣統帝の人間としての象徴は、コオロギの入れ物であった。それをそこに隠し、あるいは手放した瞬間から時代に翻弄されるラストエンペラーの物語がスタートし、年老いた宣統帝がコオロギの入れ物を取り戻した時に、翻弄する時代から開放された人間・愛新覚羅溥儀に真の意味で戻った瞬間であり、ここに本当の時代の終焉、ラストエンペラーの人生が幕を閉じた。そして、その入れ物が幼い衛兵に手渡された時は、新しい時代の幕開けでもあった。

いくつかの象徴的なシーンの舞台を取り上げたが、そのいずれもが紫禁城の持つ“本当の意味”を正確に捉えたものであり、映画のシーンに深みを与えていた。

私たちは土木建設に携わる中で、その場（舞台）の“意味性”をどれほどきちんと正確に踏まえているのであろうか。

<参考文献>

「故宮宝卷—真実の紫禁城を再現する」王鑑輪著、中国民族攝影芸術出版社
 作品名：ラストエンペラー（原題：THE LAST EMPEROR）
 （写真提供：1、松竹（株）ビデオ事業室
 2、3、4、筆者）



■写真3—溥儀の自転車のシーンで使われた長西街



■写真4—映画冒頭の即位シーンと最後に晩年の溥儀が隠していたコオロギの入れ物を、幼い衛兵に渡すシーンで使われた乾清宮の玉座



■図2—紫禁城鳥瞰図（出典：「清朝の宮廷料理」鄭志海 屈志静著、九州出版社）